

令和3年度 研究の概要

1 学校教育目標

「豊かな心と自ら学び続ける力をもち、たくましく生きる子どもの育成」

2 めざす児童像

考える子 なかよしの子 じょうぶな子

3 本年度の重点目標

- ① 主体的に取り組む授業・分かる授業の実践
- ② いじめのない楽しい学校づくり
- ③ 自ら行動できる児童の育成
- ④ 開かれた信頼される学校づくり

4 研究主題

互いに認め合い、共に学び合う
～自己との対話・他者との対話を通して、学びを深め、よりよく生きる～

5 研究主題設定の理由

社会の在り方が劇的に変わる中、新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」が来ている言っても過言ではない。そのような社会情勢でも教育現場は日々新たな課題を目の前にしている。文部科学省、中教審答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』(R3.3.30 更新)でも、「新学習指導要領の着実な実施」「GIGAスクール構想の実現」「学校における働き方改革の推進」などが掲げられ、取り組むべき課題が多くある。本校も例外ではなく、新学習指導要領に準じた「主体的・対話的で深い学び」の実現や一人一台のタブレットの活用、教員の働き方改革を日々実践している所である。

本校は今まで「聴く」「話す」を中心に添えて研究に取り組んできており、新学習指導要領と重なる部分も多くある。子どもが「主体的」「対話的」に学ぶ手立てとして、「課題・場の設定(授業のデザイン力)」「教師の姿勢(授業の対応力)」「なかふじの『聴く』『話す』『相手意識をもった場づくり』」を柱として研究の推進を行ってきた。

また、令和4年度には全国小学校道徳教育研究大会をひかえ、道徳科の授業研究、道徳教育の充実を図ってきた。中藤小は大規模校で教職員の入れ替わりも多い。また、若手の教員の割合も高い。その中で全教職員が協働して研究に取り組めるような組織づくりをしてきた。今年度は、全教員が「道徳グループ」に所属し、4つのグループに分かれ授業研究を行う。全ての教員が授業をすることで、学校全体の授業力を高められるよう努めていきたい。

道徳科の充実がすぐに、実践力など目に見えてくるのは難しく、研究も半ばである。ただ、教員が焦って、道徳科の授業が、生徒指導や徳目主義的な道徳にならないように気を付け、「考える道徳」「議論する道徳」になるよう授業改善を行っている。「道徳教育は学校の教育活動全体を通じて行うもの」とされている通り、あらゆる場面で子どもの心の成長を促したい。そこで対話を手がかりに、研究主題を「互いに認め合う」ことを目指し、各教科や生活の中で「共に学び合う」関係をつくっていきたいと考え、「互いに認め合い、共に学び合う」に設定した。

6 研究の内容

(1) 研究主題のとらえ方

「互いに認め合う」とは

- ・相手を思いやりながら、思いや考えを適切に伝え合うこと。
- ・自分の良さに気づき、他者の良さに目を向けること。
- ・児童相互に温かい心の交流が生まれ、思いやり、協力、助け合いなどの豊かな人間関係が育つこと。
- ・学習活動に意欲的に取り組み、主体的な学びの中から、学ぶ楽しさや喜び、達成感や成就感をつかみ取ることができること。
- ・自己を表現したことが集団の中で価値あることとして認められ、もてる力を発揮できること。

「共に学び合う」とは

- ・他とのかかわりを楽しいと感じ、かかわり合うことの価値に気付くこと。
- ・一人一人が自分の考えをしっかりと持ち、話し合いに参加できること。
- ・一人一人の願いや思いや活動が、さまざまな仲間や先生、地域の人と協働することで深まっていくこと。
- ・自他の体験の共有により、豊かな体験に裏打ちされた見方・考え方ができるようになること。

(2) 研究の3つの柱

①課題・場の設定(授業のデザイン力)

・各教科において

子どもたちが、対話的な「聴く」「話す」を行うためには、子どもたち自身が話したくなるような課題が大切である。教師が「探究」「目的意識」「必然性」「意外性」「当事者性」「多様性」「対立」「自己有用感」を意識して、様々な課題の設定を工夫することで、子どもの意欲を駆り立て、話すことの必要性を感じることができるだろう。また、ペア・トリオ・グループを意識的に設定したり、子ども同士のかかわりを意識したりしていきたい。他にも、ホワイトボード・付箋・思考ツールなどを活用して思考の可視化を図っていき、互いの考えを共有しやすくしていく。そして、子どもたちが、安心して自分の考えを話すことができる温かい雰囲気をつくっていきたい。

・道徳科において

教師が45分の授業の流れを考える際、ねらいとする価値に迫るため、どの場面でのような発問を投げかけるかがとても重要になってくる。そこで、発問を考える際に、「素の自分が出せる発問」「考える価値のある発問」「自分自身の経験や友だちとの対話の中で答えが導き出せるような発問」「資料の一部分だけでは考えることができない発問」などとなるように意識するようにしている。また、その発問をいつ行くと効果的に児童の思考を深めることになるかも考えている。さらに、本校では主発問に対して、考えを深めさせる「問い返し」となる発問を大切にしている。「問い返し」がある意味、本当にその時間に児童に考えさせたいことの中心となっている場合が多く、授業を考える際に、なるべく多くの「問い返し」を用意し、児童の発言や思考の流れに応じて、投げかけていきたい。

本校では、児童たちの学び合う場を設定するための手立てとして、様々な形態での学習活動や思考ツールなどの活用、心の可視化を図るためのツール、構造的な板書の工夫などを積極的に行っている。しかし、これらは、あくまでも学び合うための手段であり、

目的にならないように留意していく。

授業を考えるための一助として、「らくらくアイデアシート」を活用している。本時のねらいや内容項目の指導の観点，児童の実態やねらいを記入した上で，上記にあるような発問や授業の中での工夫について記入し，授業作りを意図的にできるようにしている。

②教師の姿勢(授業の対応力)

・各教科において

まず，教師自身が，子どもにとってよいモデルとなっていきたい。子どもの声を聴き，どう応え，反応していくのか。そして，子どもの思考を深めるために，どのようにして声かけをし，働きかけ，価値付けていくのか。今一度，教師の姿勢・立ち振る舞いを考えていきたい。また，授業や子どもとのかかわりを気軽に見合い，フィードバックし学び合うために，全教員が道徳グループに所属し，一人一授業をし，ミニ研究会を行う。

・道徳科において

授業の中で，児童のつぶやきや発言を拾いながら，次の発問や展開につなげていく必要があると考えている。もしも，考えていた発問だけを順番にするだけならば，授業に流れがなくなり，途切れた印象になってしまうからである。そこで，授業者は，教材研究の中で学習指導要領を読み，授業学年の「指導の要点」や，本時のねらいなどからキーワードとなる言葉や，発問につながりそうな言葉を挙げておくようにする。そうすることで，授業で取り上げたい言葉を意識しながら授業を行うことができ，「さっき〇〇さんが言ったことだけど・・・□□についてももう少し聞いてみていい？」や「一番みんなから出てきている言葉って□□だね。□□ってどういうことなの？」などにつながられたり，「問い返し」のきっかけを作ったりできると考える。また，キーワードを挙げておくことで，授業者のやりたいことや考えさせたいことが明らかとなり，授業の中でのブレがなくなったり，筋の通った授業ができたりすることも期待できる。

また，教師同士が学び合うための道徳グループでの授業研究を行う。年間に1回グループ内で授業公開・ミニ授業をすることで互いの授業実践・授業づくりから教師の姿勢を学び合うことを目的とし，日々の自分自身の「教師の姿勢」につながるようにしている。また，学年で取り組む教材研究として，自分が担任する以外の学級で授業を行うことで，4回の教材研究や追試，負担の軽減をする。また，学年の子どもは，学年全ての教員でみるという協働ができるようにしている。

③自己との対話・他者との対話(なかふじの「聴く」「話す」力)

・各教科において

子どもたちが，課題を追究し，深めるために，6年間を通してどのように指導していけばよいのか，中藤小学校の児童の実態に合わせて考えていきたい。ここでは，「学ぶ対象としての言葉」ではなく，「学びを媒介する言葉」を豊かにすることに主眼をおき，道徳科はもちろん，日々の授業の中でも対話できる力を身に付けさせていきたいと考えている。

・道徳科において

道徳科では，「考える道徳」「議論する道徳」を通して，多様な価値観に気付き，自己を見つめ，自己の考えの変容に気付くことを目指している。そのために，自己との対話・他者との対話は不可欠であると考えている。そこで，本校では，『なかふじの「聴く」「話す」力』と位置付け，児童一人一人が考えをもって他者と交流し，自分の想いを伝

えたり相手の考えを聞いたりする場面を多く設定している。友だちに話すことで自分の考えを再構築できるだけでなく、友だちの考えを聴くことで新たな価値に気付くことも期待している。また、「本音を話すこと」ができることが「考える道德」「議論する道德」の上では欠かすことができない。うわべだけの「よさ」や徳目的な道德にならないように、他者の言葉に時に共感し、時に批判しながら「議論」できることを目指している。すべての教育活動を通して大切なことであるが、道德科でももちろん、安心して発言し聴いてもらう「応答関係」を構築していきたいと考えている。

(3) 研究の組織

研究の組織

学年会

それぞれの所属学年

なかふじは独立（必要に応じて関係の学年会に参加）

低中高学年部会

○低学年部会（◎齋藤，三屋，西川，小川，木村，経石，森本，土谷，酒井 院：川畑）

○中学年部会（◎河合，綿谷，桶屋，天井，久藤，佐々木，

原谷，三崎，竹原，飛山，五十嵐，成川 院：岩城）

○高学年部会（◎西間木，出雲，大野木，片岡，大石，植坂，小竹，

山本，坂部，森下，伊達，畑中 院：大西 河野）

※堀江・高山は所属しない。

道德グループ

○Aグループ（◎西川，㊦河合，小川，桶屋，佐々木，植坂，坂部，土谷，畑中，高山，
院：河野）

○Bグループ（◎森下，㊦齋藤，森本，綿谷，三崎，大石，成川，飛山，山本
院：川畑）

○Cグループ（◎片岡，㊦大野木，木村，天井，原谷，酒井，伊達，堀江，
院：岩城）

○Dグループ（◎㊦出雲，㊦西間木，三屋，経石，久藤，竹原，五十嵐，小竹
院：大西）

研究推進委員会（校長・教頭・教務・研究企画 計8名）

研究企画（西間木・齋藤・河合・出雲・大野木）

提案授業

前期指導主事訪問 5年 西間木

後期指導主事訪問 2年 経石

中藤小学校道徳科研修会・プレプレ

1年	2年	3年	4年	5年	6年	なかふじ
齋藤	木村	天井	三崎・原谷	植坂	大野木	成川

プレ大会

1年	2年	3年	4年	5年	6年	なかふじ
西川	森本	桶屋	竹原	大石	出雲	土谷

道徳担当

1年	2年	3年	4年	5年	6年	なかふじ
齋藤	木村	桶屋・佐々木	三崎	片岡	森下	土谷

灯中3部会

灯中学習部会 ◎齋藤	生徒指導・教育相談部会 ◎小川	キャリア教育部会 ◎植坂
経石・天井・河合・竹原 ・西間木・小竹・坂部・ 伊達・綿谷	西川・森本・桶屋・佐々 木・原谷・大石・山本・ 出雲・土谷・成川・ 五十嵐・高山・堀江	三屋・木村・久藤・三崎・ 飛山・片岡・森下・大野木 ・畑中・酒井

敬称略

(4) 具体的な取組

教師協働でつくり上げる授業

- ・ 道徳グループでの授業実践検討
4グループに分かれて、年1回すべての教員が授業公開、ミニ研究会を行う。
- ・ 学年協働による年2回以上(中藤小学校道徳科研修会・プレ大会)の授業づくりを行う。
- ・ 学年での教材研究
各担任・副担任が一つの教材で各クラスの授業を行う。そうすることで一つの教材に力をいれて研究を行うことができるとともに、負担の軽減も意図している。また学年の子どもを学年全教員でみるという協働も狙っている。
- ・ 省察を協働で行う。
実践記録は、同じ学年の授業者以外の者が書く(指導案・実践シートは授業者が作成)

中学校区を中心とした取組の活性化

- ・ 中学校区教育を推進する。(本校は授業づくり事務局)
灯明寺中学校区研究テーマ

主体的に取り組み、共に学び合う児童生徒の育成
～学ぶ喜びを味わえる指導のあり方～

市教委からの視点

- ・ 授業づくり
- ・ 夢を育む生き方教育
- ・ 気になる子どもの支援

さまざまな仲間との積極的な研修

- ・ 校外の研修に積極的に参加し、見識を広げる。
- ・ 小教研や研究所などの研修
- ・ 福井大学教職大学院ラウンドテーブル
- ・ 先進校視察

○福井大学教職大学院拠点校

- ・ 平成28年度以降も継続
- ・ 福井大学教職大学院で学ぶストレートの院生、ミドルリーダー養成・学校改革マネジメントコースの教員が学ぶ学校
- ・ 年2回の指導主事訪問、校内研究会、全体研究会に大学院の先生に参加していただく。

